

# 発達及び価値観に関する心理学研究の整理 —留学生から労働者に立場を変える外国人のキャリア問題を扱うために—

李 奎台

## A Review on Psychological Research of Development and Sense of Values: for the Research of Career Problems of Those Who Change Their Statuses from International Students to Foreign Workers

LEE, Kyutae

### Abstract

This paper reviews psychological research related to two important concepts, which are development and sense of values. These concepts have been employed in much research, without sharing the common definitions. As the concept of development, this paper introduces four main approaches of developmental psychology, which are psychoanalytic approach, cognitive developmental approach, social learning theory and sociocultural approach. As the concept of sense of values, this paper reviews its general definition, some definitions in previous research, and its functions.

### 目次

- |                         |                           |
|-------------------------|---------------------------|
| 1. はじめに                 | 3. 価値観とは                  |
| 2. 発達とは                 | 3.1 価値観の一般的な意味            |
| 2.1 「発達」「成熟」「成長」について    | 3.2 価値観に関する先行研究における価値観の定義 |
| 2.2 「発達」に関する研究の四つのアプローチ | 3.3 価値及び価値観の定義            |
|                         | 4. 留学生のキャリア問題における発達と価値観   |

## 1. はじめに

近年、日本国内では外国人労働者<sup>1</sup>が増え続けており、その数は2015年10月末の時点で、90万人にも上り、過去最高を更新した（厚生労働省2016）。ただ、外国人労働者の増加に伴い、様々な問題も報告されている。例えば、福岡・趙（2013）では、外国人労働者は企業への定着率が低いこと、そしてそれが原因で、企業が留学生の雇用を躊躇することもあると報告されている。また、日本企業に対して質問紙調査を実施したディスコ（2014）<sup>2</sup>によると、留学生を採用したことにより社内で起きた問題の60.9%は、「文化・価値観、考え方の違いによるトラブル」であるという。その結果は、異なる環境で育ち異なる価値観を持っている者同士が働くことの、困難を示しているといえよう。

ディスコ（2014）が日本企業を調査対象としているのに対して、近藤（1998；2016）は、外国人労働者を調査対象とした研究である。近藤（1998）は、外国人労働者に対して業務上の問題点に関する質問紙調査を実施し、因子分析をした結果、「不当な待遇」「仕事の非効率」「仕事にまつわる慣行の相違」「文化習慣の相違」という4つの因子を明らかにした。特に、「仕事にまつわる慣行の相違」と「文化習慣の相違」は、ディスコ（2014）が挙げた「文化・価値観、考え方の違いによるトラブル」と関連深い。外国人労働者の価値観について、近藤（2016）は、日本人と外国人労働者双方にインタビューをし、「それまでに培ってきた価値観を固持していると、そのずれから互いを理解したり尊重したりすることが難しくなり、誤解が生じ両者間の協働を妨げることになる」という結果を提示した。さらに、他者との議論を通じて他者の価値観に触れることで、「他者の意見を参考にしながら、自身の改善方法を自ら提案するようになる」と述べており、他者との関係の中で価値観が変容する可能性も、同時に示唆している。

外国人労働者の企業への定着率の低さが指摘されている現状で、企業側と外国人労働者の両方から問題とされている価値観に注目する意義は、大きいだろう。

また外国人労働者の中には、日本の教育機関（日本語学校・専門学校・大学・大学院）で教育を受けてから、日本で就職する者も多く含まれている。留学生の日本企業等への就職状況調査（日本入国管理局公開統計資料）によると、平成25年の「留学」から「就労」への在留資格変更許可申請者は、12,793人（前年比1,095人増）であり、その内許可された者の数は11,647人（前年比678人増）だった。少子高齢化問題を抱えている日本の状況を考えると、今後もこのように、留学生から外国人労働者になる者の数は増え続けることが予想される。そのため、彼らの価値観の変容を明らかにし、留学生を対象とするキャリア支援教育の充実をはかることは、安定した労働力確保を望む企業側にとっても、意義のあることである。

留学生から外国人労働者になる者の特徴として、その多くが、発達心理学の観点から青年期に含まれることが挙げられる。青年期とはErikson（1950）によると、「自分はどのような性格なのか、将来どのような生き方をしたいかを模索しながらアイデンティティを形成していく時期」であり、自我が大きく変わる時期だといえる（下山1998を参照）。そのような時期にある留学生は、日本で就職し労働者となるのか、母国に帰るのか、また就職するならばどのような仕事に就くのかなど、「将来どのような生き方をしたいかを模索」する。そしてそのような時期を経て、「特定の異性と親密な関係をもつことで相手を尊重し、大切に想う気持ちを育む時期、結果として家庭を築く人が多い時期」（Erikson 1995）とされる成人期（初期）に移行していく。そのように発達心理学の観点から見れば、個人の価値観もまた、発達の過程で変容するもの（または発達するもの）の一つとして、捉えることができる。そのため、留学生から外国人労働者になる者の価値観がどのように変容するのか、そして彼らが継続的に就労していけるのかどうかには、その発達過程が大きく影響すると考えられる。初めから就労を目的として来日する外国人労働者にとっては、この発達という概念は、関り深くはないだろう。彼らの多くは、「将来どのような生き方をしたいか」を母国で模索した上で、日本で

働くという選択肢を選び来日するからである。

つまり、日本で留学生から労働者になる者は、様々な異文化を経験しながら、また発達の過程で自我と向き合いながら、就職活動をし、就職し就労するといえる。そしてその中で彼らの価値観は、恐らく大きく変容することと考えられる。その価値観の変容を明らかにすれば、企業への定着を進めるために教育機関でどのようなキャリア支援教育ができるのか、議論することができるだろう。しかし、この発達及び価値観という用語は、多くの研究者が多種多様な意味とともに用いており、研究者間で共通の理解があるとはいえない。そこで本稿では、留学生から労働者に立場を変えて就労する者の課題を研究対象とする前に、そこに密接に関わる発達及び価値観という概念を整理することを、目的とする。

まず、2節では、発達という概念が、心理学でどのような意味で用いられ研究されてきたかを概観する。研究者がどのようにそれを捉えようとしてきたのか明らかにするために、四つのアプローチを紹介したい。続く3節では価値観の概念を整理し、4節でそれらをまとめ、今後の研究で留学生から外国人労働者になる者の価値観を捉えるのに有効なアプローチを紹介する。

## 2. 発達とは

本節では発達という概念について、2.1でその用語の意味について説明し、2.2でそれを扱ってきた四つの代表的な研究アプローチを紹介する。

### 2.1 「発達」「成熟」「成長」について

「発達 (Development)」<sup>3</sup>とは、受精から死にいたるまでの心身の上昇的及び下降的变化過程<sup>4</sup>を意味する (藤村・大久保・箱井 2000)。一つの細胞から人間として生まれ、歩くようになり、話すようになる。頭の中で考え、行動する。友達ができて、思春期になると、身体的に変化が見られ、異性に興味を持つように

なるとともに自己形成をしていく。このような変化過程は、人間であれば誰でも経験することで、発達には、身体能力 (運動能力)、知的能力、言語、社会的関係、道徳、性格、価値観などの身体及び心理に関連する全ての領域における変化が含まれている。また、その変化には順序がある。このような変化を発達として捉えて研究する代表的な分野が発達心理学 (Developmental Psychology) である。発達心理学は、人間の発達に関する研究分野であり、年齢の増加とともにどのような変化が起き、なぜ、そのような変化が起きるか、発達の変化における個人差や個人差の原因を追究する。発達心理学の学問的な目標は、年齢ごとの発達の変化を客観的かつ正確に記述すること、その変化の原因を明らかにすること、ある個人の発達水準を診断し、望ましい方向へ発達を導くために必要な環境作りをすることである。例えば、平均何歳から話せるかが分かることで、ある子どもの言語発達が平均的な発達過程に沿っているかどうか判断できる。

発達の類似概念として、「成長 (Growth)」<sup>5</sup>、「成熟 (Maturation)」<sup>6</sup>が使われる研究もある。成長とは、心理学の世界では身体的心理的な上昇的变化を意味する。例えば、年を取って身長が伸びたり、体重が増えたりする変化や、少年期の知能の変化などは成長と呼べる。また、生まれてからもっている要因による変化を表すとき、成熟といえる。例えば、人間が生まれて約1年後には直立歩行するようになることは、人間の先天的能力であり、内的要因に影響された変化である。しかし、病気により知能が変化したり、性格が変わったりしたときの心理的变化は成長とは言わない。また、老年期に入り、身長が縮まったり、体重が減ったりしたときも成長と言わない。つまり、成長という言葉には、「伸びる・増える・増加する」という「上昇」の意味が含まれている。

次に、成熟という言葉は、生まれてからもっている要因により、変化することを表す。例えば、人間が生まれて約1年後には直立歩行するようになることは、(人間の先天的能力) 成熟の要因に影響された変化である。心理的な変化を表すときは、性格あるいは人格

が望ましい方向に変化したとき、成熟という言葉が使われている。望ましい方向への変化を表すという点で発達と成熟は似ているが、成熟が人間が本来持っている性質（内的要因）による変化を表すのに対して、発達には個人の経験、他者との相互作用（外的要因）による変化も含まれている点が成熟と異なる。

ここまで述べたように、発達、成長、成熟は、類似する概念である。発達は、身体的及び心理的（精神的）な変化を表すこと、身体的能力の上昇だけではなく下降<sup>7</sup>も含まれていることが、成長や成熟と異なる。3節で詳しく見ていく価値観の変容は、発達の中の心理的な変化に含まれている。

それでは次に、発達に関する四つの代表的なアプローチを見ていくこととする。

## 2.2 発達に関する研究の四つのアプローチ

### 2.2.1 精神分析学的アプローチ

(Freud 1974; Erikson 1950)

発達心理学における精神分析学という領域では、子どもは生物学的欲求と社会的期待の間で葛藤しながら、それらの葛藤を解決する過程の中で、学習能力と、他人との関係及び不安に対処する能力を発達させると主張されている。この分野を代表する研究としてFreud (1974) と Erikson (1950) が挙げられる。

Freud (1974) は、成人の無意識に潜在する記憶から、心理性的発達理論 (Psychosexual Development) を提

唱した。この理論によると、子供が発達初期に親から性的・攻撃的衝動に関してどのような指導を受けるかで、その後の健全な人性発達に影響を及ぼすとのことである。ここでいう人性とは、「イド (Id)」<sup>8</sup>、「自我 (Ego)」<sup>9</sup>、「超自我 (Superego)」<sup>10</sup> という3つの精神部分が、5つの段階を経て統合することを指す。Freud が提示した5つの段階は、下記、表1における「口唇期」から「性器期」が終わるまでの年齢、つまり、生まれてから思春期に入り、性的に成熟する時期までの段階である。Freud は自分自身の経験に基づいて、人間の本能的な欲求（「イド (Id)」）、特に性的欲求に焦点を当てて、研究を進めた。そして3つの精神分野を統合し、人性が発達するかどうかは、初期段階に家族、主に親とどのような関係を持つかによると、主張した。Freud の理論では、子どもは生まれてから両親や家族とどのような関係を築くのかにより、人格が決定されると主張され、人格発達は青年期までに行われることとして捉えられている。それに対して Erikson は、人間関係における人性発達を、児童期までの家族関係によるものではなく、より広い範囲の社会的関係に拡大し、発達する時期を乳児期から成人期（後期）に至るまでの8段階における全生涯を通して分析した。以下に Freud と Erikson による発達段階を、提示する。

さらに Erikson は、下記の8つの発達段階には肯定的な面と否定的な面があり、その両面の葛藤を「危機」と呼んだ。その「危機」を解決しながら、人は次の段階に進んでいく<sup>11</sup>。そしてそのような「危機」を解決

表1 Freud と Erikson の人間の発達段階

Freud の発達段階	Erikson の発達段階
口唇期 (0~1 歳の乳児期)	(I) 乳児期
肛門期 (1~3 歳頃)	(II) 早期児童期
男根期 (4~5 歳頃)	(III) 遊戯期
潜伏期 (小学生の時期)	(IV) 学齢期
性器期 (12 歳以降の青年期)	(V) 青年期
—	(VI) 成人期 (初期)
—	(VII) 成人期 (中期)
—	(VIII) 成人期 (後期)

渡辺映子・勝倉孝治 (2003) 『はじめて学ぶ人の臨床心理学』の参照

する中で発達が生じるため、人間の発達は死ぬまで続くことになる。表2に、Erikson（1959）が提唱した8つの段階に存在する肯定的な面と否定的な面（心理的危機・葛藤）と、各時期の重要な対人関係と特徴を示す。

Eriksonによると、各発達段階の肯定的な面と否定的な面を経験し、その葛藤を解決しながら人は発達する。そしてEriksonは、8つの発達段階の中でも特に、乳児期と青年期が重要であると主張した。乳児期は、自分を取り巻く人が基本的に信頼できる者なのかどうか感じるにより、信頼感が形成され、その後の人間関係の土台になるためである。この時期に虐待を受け、「人は信頼出来ない」「不安」という感覚を覚えることは、大人になってからの人間関係に影響を及ぼす

ということである。青年期は、自分の進路や生き方を考える時期であり、この時期の始まりは第二性徴とも重なり、男性なら男性らしい、女性なら女性らしい肉体にはっきり変化していく時期である。この時期には、自分は他人の目にどう映っているのか（どのように思われているか）が気になりやすい。また、青年期は、この世に生きている自分という存在を意識し始め、アイデンティティが形成される時期である。この時期にアイデンティティがしっかりと形成されないと、自分はいったい何者なのかというアイデンティティの混乱から、精神的に不安定になる可能性がある。そのため青年期が、乳児期と同じく重要な時期であるとEriksonは主張した。

表2 Eriksonによる発達段階における肯定的な面と否定的な面及び重要な対人関係

Eriksonによる 発達段階	肯定的な面と 否定的な面	重要な対人関係	特徴
(Ⅰ) 乳児期	基本的信頼感と 基本的不安感 (Basic Trust vs. Basic Mistrust)	母親的な人物	誰か（親）を心から信頼できるという気持ちを持てるようになることが大切な時期
(Ⅱ) 早期 児童期	自律性と羞恥心 (Autonomy vs. Shame and Doubt)	親的な人物（複数）	自分の意志排泄や生活をコントロールできることを学ぶ時期
(Ⅲ) 遊戯期	主導性と罪悪感 (Initiative vs. Guilt)	基本的家族	自分の考えで行動することを覚える時期であり、大人は子どものやろうとする気持ちを大切に育てる必要がある時期
(Ⅳ) 学齢期	勤勉性と劣等感 (Industry vs. Inferiority)	学校	やればできるという体験をして、勤勉に努力することを覚える時期
(Ⅴ) 青年期	正体性と正大性混乱 (Identity vs. Identity Confusion)	仲間集団と外部集団 の指導性のモデル	自分はどのような性格なのか、将来どのような生き方をしたいかを模索しながらアイデンティティを形成していく時期
(Ⅵ) 成人期 (初期)	親密さと孤立 (Intimacy vs. Isolation)	友情・生・競争・協 力の相手	特定の異性と親密な関係をもつことで相手を尊重し、大切に想う気持ちを育む時期、結婚して家庭を築く人が多い
(Ⅶ) 成人期 (中期)	生成感と沈滞感 (Generativity vs. Stagnation)	分業と共同の家庭	次の世代の人々のために知識・経験・愛情を継承していく時期
(Ⅷ) 成人期 (後期)	満足感と絶望感 (Integrity vs. Despair)	人類全体・コスモ ポリタンの範囲	今までの人生を振り返り、自我の統合をはかる時期

下山 晴彦（1998）『教育心理学Ⅱ発達と臨床援助の心理学』の参照

なお、青年期の者は教育機関に所属している場合が多く、学内で様々な支援が受けられる。ただし、青年期後期から成人期に当たる社会人になると、周りからの期待及び受ける支援が学生のときとは異なると思われる。思う通りに上手く行かない、満足できないと思うこともあり、会社を辞めてしまう者もいるだろう。また社会人という社会的役割を背負うことで、その分責任感も重くなり、心理的負担も大きくなりやすい。これは留学生から外国人労働者になる者たちにも、いえることである。

### 2.2.2 認知発達のアプローチ (Piaget 1972)

スイスの心理学者である Piaget (1896 ~ 1980) によると、人間の認知発達は、環境との相互作用によって行われる適応過程である。認知とは、様々な方法によって学習したことを記憶した後、それを使用するまでの精神過程を意味する。彼は生物学に影響され、生物が環境に適応する過程に関する理解を、人間の認知発達にも適用できるという見解を持っていた。そして身体構造が環境に適応していくように、思考の構造も外部世界に合わせて4つの段階<sup>12</sup>を経て発達すると主張した。

Piaget の認知発達論における重要概念は、「スキーマ (Scheme)」、「同化 (Assimilation)」、「調整 (Accommodation)」、「平衡 (Equilibrium)」という4つである。スキーマとは、過去の記憶・経験・知識の集積として形成された「(行動決定・感情生起の基盤にある) 知的枠組み・解釈の枠組み」を意味する。同化とは、既に持っている「知的・解釈の枠組み」に新しい経験を統合する適応過程を意味する。調整とは、新しい経験を受容するために自分自身の「知的・解釈の枠組み」を修正する適応過程を指す。最後に平衡とは、新しい状況の中で一貫性と安全性を求める試みを意味し、継続的な同化と調整の過程を通じて形成されることがある。このような適応能力は先天的なものであり、知能や社会環境によって至る年齢には個人差があるが、誰もが同じ順序に沿って発達すると Piaget は主張した。このよ

うに人の認知面に注目し、その発達の過程を捉えようとするのが、認知発達のアプローチである。

学生は社会人になる際、就労に関するスキーマを有していると考えられる。そして実際に就労を始めそれを経験することで、同化と調整が生じると考えられる。そしてどうかと調整の過程を通じて、就労環境の新しい状況の中での平衡が形成される。それが認知発達のアプローチから見た、就職に伴う心理的变化である。

### 2.2.3 学習理論的アプローチ (Skinner 1953; Bandura 1977)

人間は生まれてから死ぬまで、学び、習得しながら生きる存在として捉えられ、学習理論に基づいて実施されたものが挙げられる。学習理論の中で代表的な理論として、新行動主義 (Neo-behaviorism)<sup>13</sup> の Skinner (1904 ~ 1990) による操作的条件形成 (Operant Conditioning) 理論が挙げられる。

Skinner (1953) は、スキナー箱<sup>14</sup>を用いて、道具的条件付けの実験を行い、人間が自発的な行動を形成するための条件を明らかにした研究である。道具的条件付けには、報酬 (快の刺激) が得られることで自発的行動の発生頻度を増加させる正の強化 (Reinforcement) と、反対に罰 (Punishment) を与えることで、その発生頻度を減少させる負の強化がある。操作的条件形成理論では、人間行動の形成と消去を合理的に説明するだけでなく、正・負の強化子を用いることで実際に人間の行動発現をある程度コントロールすることができると考え、人間の思考・認知が学習により可能であると考え。Skinner (1953) が主張したその理論は、児童心理学や教育学に影響を与えた。例えば、学生に対する教師の称賛・叱責は、Skinner の操作的条件形成理論における「正・負の強化」として考えられる。社会人にとっては、上司や同僚、顧客などが称賛及び叱責をしてくる相手となるだろう。

Skinner の操作的条件形成理論の強化の概念を更に発展させた Bandura (1977) は、子供が周囲の人の行動を観察し、モデリングとし、模倣行動をしながら発

達すると主張し、それをモデリングによる学習と呼んだ。そして、Skinner が主張した学習理論に社会性を取り入れ、社会学習理論 (Bandura 1977) を提唱した。

社会学習理論は、以下の過程から構成されている。まず、ある行動が観察を通して学習されるには、その行動が注意を引かなければならない。そのためには、モデル対象が注目される必要がある。2つ目に、観察された行動は、象徴的表象 (Symbolic Representation)<sup>15</sup> により記憶されなければならない。これは、モデルを観察した後、ある程度時間が経ってから、観察学習 (Modelling)<sup>16</sup> が行われるためである。3つ目に、記憶されたモデルの行動が、自分の行動として行われるためには、再生産の過程を経る必要がある。最後の過程は、動機・強化過程である。

社会人の場合、周りにいる上司や同僚がモデル対象となりうるだろう。そしてそれらのモデルを観察することで、就労に関する観察学習が生じると考えられる。

#### 2.2.4 社会文化的アプローチ (Vygotsky 1978)

心理学研究では、心理過程の普遍性 (客観性) を前提とした伝統的なアプローチによる研究が蓄積され、人間の心的機能の特性は、社会的、文化的な状況から独立して生じるものとして捉えられていた。しかし個人の心理を社会と文化から分離させた視点からは、社会や文化に影響されて形成される人々の価値観 (例えば、民族性、国民性など) の説明ができなくなる。そのような観点から学習と発達を、個人の持つ生物学的要因と個人が生きてきた社会文化的環境要因との相互作用過程として捉えたのが、ロシアの教育心理学者 Vygotsky (1896 ~ 1934) である。

Vygotsky は最近接発達領域 (Zone of Proximal Development) という重要概念を用いて、子どもの知的発達が、子ども自身より認知的に有能な人 (大人もしくは仲間) との社会的相互作用を通して行われることを明らかにした。最近接発達領域とは、子どもが一人で到達できる実在的発達水準と、知的水準がより高

い成人あるいは仲間の助けにより到達できる潜在的発達水準との間の差異を表す (Vygotsky 1930; 1978)。そして、Vygotsky は、文化的に有効な活動が出来るように助けてもらう過程の中で、自分より熟練した仲間と行うコミュニケーション (対話) が、徐々に子どもの思考の一部になっていくと主張した。このような対話を通して学んだことを内面化していくことで、人は自分自身の行動を主導的に行うと同時に、新しい技術を獲得することになる。日本に留学している者の場合、日本語を学んでいく中で出会う教師・先輩・クラスメイト・日本人と日本語で行う対話は、彼らが有効な活動ができるようになるために重要である。

Vygotsky の理論では、文化的に適切な思考様式と問題解決方式を子どもに伝達する道具としての役割<sup>17</sup> が、言語にあると考える。生まれたばかりの赤ちゃんにとって、大人が使う言葉 (「外言」) は、ただの音声に過ぎないが、しだいにその意味を理解し、その言葉を使って頭の中で話していること (「内言」) を伝えることができ、大人との交渉・意思疎通ができるようになる。日本に留学している者の場合、内言は主に母語となり、その母語は母国で形成された価値観と関連深いと思われる。

以上が発達に関する代表的な4つのアプローチである。様々な点に注目して、これまで人間の発達が研究対象とされてきたことを、ここで示すことができたと考えている。2010年代現在では、各時期に身体及び心理がどのように発達していくのかに注目する臨床心理学的な研究は、精神分析学的アプローチを参考にしている。そしてその発達が、学習によっていかに促されるかに注目する研究は、認知発達のアプローチを基盤とし、その認知過程の変化まで含めて分析している。続いて、学習理論的アプローチは、教育心理学を中心に用いられている。特に、個人の態度によって学習成果が異なることを主張した Bandura の観点を取り入れながら、教師と学生間の相互作用による学習が重視されている。また、特に最近では、社会文化的な状況の中に生きながら、個人がどのように学んでいき、自分の中でどのように学んだことを解釈するか、という個

人の生き方及び価値観を視野に入れた観点が、教育心理学及び社会心理学の全般に広がりつつある。

続いて次節では、価値観という概念について見ていきたい。

### 3. 価値観とは

#### 3.1 価値観の一般的な定義

ここでは、価値観という用語が一般的にどのような意味を持ち、どのように使われているかについて述べる。まず価値観の定義に先立ち、価値 (Value) の定義を紹介する。広辞苑 (2008) でそれは、「①物事に役に立つ性質・程度。…ねうち。効用。②〔哲〕「よい」と思われる性質。」と定義されている。例えば、①の意味では、「価値が高い (あるいは、低い)」のように使われ、価値を測定できるものとして考える。また、②の意味では、ボランティア活動について「価値のある活動」のように使われ、社会的に「よい」と認められている概念が含まれていることが分かる。

続いて価値観 (Values, Value Orientation, Sense of Values) は、広辞苑 (2008) 及び大辞泉 (2012) により以下のように定義されている。

- ① 何に価値があると認めるかに関する考え方 (広辞苑 2008)
- ② 価値 (善・悪・好ましいこと・好ましくないこと、といった価値) を判断するときの根底となるものの見方 (広辞苑 2008)
- ③ ものごとを評価・判断するときに基準とする、何にどういう価値がある (何には価値がない)、という判断 (大辞泉 2012)

価値観は、人がある物事の価値を判断する時の基準になるものとして考えられる。その価値というものは、個人の「善・悪・好ましいこと・好ましくないこと」に影響されており、国や文化圏の社会的慣習や文化によって異なるだけではなく、性別、年齢によっても変わってくる。例えば、韓国は三国時代から中国の儒教

思想を受容しており、韓国の伝統的な思想には多くの儒教の価値観が含まれている。儒教の基本思想である「三綱五輪」<sup>18</sup> は、社会における人間関係の基本となる倫理・道徳を指す。現在も韓国では、親が年を取ると、その子息が同居し、扶養することが「当たり前」のように思われているが、他の国では必ずしも「当たり前」な考え方ではないだろう。また、時代の変化とともに、子息が両親を施設に委託することは悪いこと (不孝) ではない、という考えも増えているようである。同じ文化圏でも、「子が親を扶養することに関する価値観 (家族観)」は異なりうる。また、価値観には「個人の価値観」と「個人が属する社会の価値観」があり、両者の間にはある程度の一致が見られる、とされている (Rokeach 1973)。

留学生の場合、個人の価値観と、出身国で通用する価値観 (個人が属する社会の価値観) を持って来日するといえる。そして日本で生活しながら、留学生は日本社会で通用する価値観、及び留学生が接する日本人の個人の価値観に触れることになる。さらに留学生から外国人労働者へと立場を変えれば、また新しい価値観に触れる機会も生じてくるだろう。

#### 3.2 価値観に関する先行研究における価値観の定義

価値観に関する研究は心理学を中心に、1950年代から行われてきた。以下に従来の研究における価値・価値観の定義を表3にまとめる。

価値観に関する初期研究である Perry (1954)、Morris (1956)、Tyler (1965) は、価値を興味、好みと関連付けて定義している。一方、社会心理学者である Rokeach (1968) は、人間の態度と価値観を関連付けて研究した。

Rokeach (1968) では、価値や価値観という用語の定義はされずに、態度という用語を用いて価値観に関する分析がされていた。Rokeach (1968) による態度とは、「特定の対象 (人、物、事件、現象、関係など) に対して選好するか、嫌悪するか、の評価の過程から



表3 従来の心理学研究における価値・価値観の定義

著者	刊行年	価値・価値観の定義
Perry	1954	価値、あるいは価値があること（価値観）とは、特定の物事が根源的に興味の対象になることを意味する
Morris	1956	価値観とは、人間が選択できる行動過程の中で、選択に影響を与える規範になる標準である
Tyler	1965	①価値とは、人間が様々な対象・物事の中で、一番選好する傾向を意味する（実用的価値 Operative Value） ②価値とは、場合によっては特定の行動に伴う結果に対する期待感から生じた選好行動を意味する（潜在的価値 Conceived Value） ③価値とは、何を選好するかに関係なく、何が望ましいか、正しいか、の傾向を意味する（客体的価値 Object Value）
Rokeach	1968; 1973	①「態度」とは、「特定の対象（人、物、事件、現象、関係など）に対して選好するか、嫌悪するか、の評価の過程から表れる行動の性向」である ②価値は、「人間の望ましい行動様式に関する信念と態度」であり、目的価値（Terminal Value）と、道具的価値（Instrumental Value）という2種類の価値がある ③価値観とは、「ある行動様式、またはある最終的状態を反対の行動様式や最終的状態よりも望ましいとする永続的な個人的または社会的信条」である
MaKinney	1975	価値観は、知覚的に図式化されることと類似した過程を経る経験の結果である。価値観とは、新しい行動を行うための指針の作用をする、過去の行動の図式的表現（Perceptual Interpretation of Values）である

表れる行動の性向」である。この「特定の対象を選好するか、嫌悪するか」は、それを評価・判断する人によって決められることであり、その判断者の興味、性格のような心理的特性に影響される。また、特定の対象に対する価値観が変わると、外的に表れる態度も変わる可能性がある。

MaKinney（1975）は、価値観を過去の経験によって形成されるものとして捉えている。異なる文化圏、国による価値観の相違を論じているこれまでの研究と異なり、時間の経過という概念を取り入れ、過去の経験が現在の行動に影響することを主張している。つまり、現在どのような経験をするかは、将来の行動に影響を及ぼす可能性があり、価値観の時間による変容の可能性が示唆されたといえる。

その他、Kluckhohn & Murray（1954）は、価値観を性格（Personality）<sup>19</sup>の下位概念として位置づけ、性格を「人間の特定の行動を決定する際に作用する非知的心理構造である」と定義している。また、冢（2013）は、価値観の機能には、行動指針としての機能、評価基準としての機能、動機づけとしての機能があると述べている。行動方針としての機能とは、ある特定の物

事や人物などに対して、反応しなければならないときに、自分がどのような反応をするか、どの程度で反応し行動するかを考慮し、どのような方針で反応し行動するかを決める機能である。どの程度強く（あるいは弱く）反応するかは決定は主に能力に関わり、どのような方針で反応するかは決定は、価値観に関わる。例えば、謙虚な態度で他人と接する人の行動は、「人と接するときは謙虚な態度をとることが価値のあることである」という価値観に影響されていると、解釈することができる。次に、評価基準としての機能とは、社会に生きている一人の社会構成員として、様々な社会現象に対して評価を行うときに、各個人が持っている価値観が、その評価の基準となることを指す。最後に、動機づけとしての機能とは、人間が一定の動機によって行動する際の価値観の機能を意味する。例えば、大学を受験するために一日中勉強する学生の行動は、動機と関連し、その動機づけに価値観が影響を与えていると思われる。そして動機づけには、社会文化的（環境）要因と個人の意志や意図が関わる。ここでいう意志や意図には、個人の欲求、価値観、興味、信仰が含まれている。このような意志や意図が、個人の動機づけに

影響することから、価値観が動機づけの機能を持っていると正 (2013) は主張している。以上が、これまでの研究における価値観の定義の概観である。

続いて、次節では、留学生から労働者になる者の価値観に関する研究を今後行っていくための価値観を定義したい。

### 3.3 価値及び価値観の定義

上に述べた従来の価値観に関する研究を参考にし、筆者は、今後の一連の研究において「価値」及び「価値観」を以下のように定義することとした。

#### ・「価値 (Value)」(固有性・普遍性・流動性)

ある対象 (もの、ものごと、人) がもっている善・悪・好ましいこと・好ましくないことといった性質である。その性質には、特定の対象が本来からもっている固有性と普遍性をもつものと、特定の対象を判断する者の興味・性格・好みによって変化する流動性をもつものがある。

#### ・「価値観 (Values, Value Orientation, Sense of Values)」

特定の対象に対して、価値の有無、どのような価値があるか、どの程度の価値があるかを判断するとき、基準となるものを意味する。その基準には、判断する者が所属している文化圏や組織で普遍的に認められた客観的なものと、判断者と特定の対象との関係によって生成された主観的なものがある。そのどちらを優先し判断基準とするのかは、判断者の個人的な状況によって異なる。

## 4. 留学生のキャリア問題における発達と価値観

本稿では、留学生から外国人労働者に立場を変える者の困難を研究対象とする前に、重要な概念である発達と価値観についての整理を試みた。基本的であるが定義が共有されているとはいいいがたい発達と価値観の概念について、様々な研究者の立場やアプローチを紹

介し、整理を進めることができたと考えている。留学生から外国人労働者になる者の多くは、先に述べたように、発達心理学の観点から見ると青年期に含まれる。そのため彼らは青年期から成人期への様々な心理的变化を、就職活動や就労を始める時期に経験すると考えられる。そしてそれらの変化には、日本で就職する日本人や、韓国で就職する韓国人が経験する変化と共通するものも多いだろう。しかしこれまで外国人労働者の価値観の変容に注目する研究は、異文化という観点からそれを論じるものがほとんどだった。本稿で発達と価値観という二つの重要概念を整理したことによって、その価値観の変容をこれまで通り異文化の観点から見ただけではなく、発達という観点からも見ていく必要があることを、示すことができたと考えている。

本稿ではここで最後に、キャリアに関わる問題を、発達という観点から捉えようと提唱されたアプローチを紹介したい。その提唱者は、アメリカの研究者である Donald E. Super (1910 ~ 1994) である。彼はキャリアを、人生で一度きりの職業選択というイベントではなく、生涯にわたるプロセスとして捉えている (Super 1990)。そして、「変化する自分と状況の中で、人と職業のマッチングの過程は決して完全には達成されず、断念と統合の過程こそキャリアである」と主張している (Super 1990)。そして、キャリアを通じて自己概念を発達させ、自己実現していくプロセスをキャリア発達 (Career Development) と呼び、キャリア発達に関するライフ・スパン/ライフ・スペース理論的アプローチ (a life-span, life-space approach to career development, Super 1980; Super & Savickas 1996) を提唱した。この理論には、「キャリア自己概念 (Career Self-concept)」と「職業適合性 (Vocational Fitness)」 「ライフ・スパン (Life-span)」 「ライフ・スペース (Life-space)」 という4つの鍵概念がある。以下順に見ていく。

Super (1963) によると自己概念とは、「個人が主観的に形成してきた自己についての概念 (主観的自己) と、他者からの客観的なフィード・バックに基づき自己によって形成された自己についての概念 (客観的自

己)の両者が、個人の経験を統合して構築されていく概念」であり、そのキャリアに関する側面がキャリア自己概念である。これは3節で整理した価値観の内、キャリアに関する価値観と同義だといえる。

次に、職業適合性は、適性やスキルといった能力(Ability)の側面と、適応や興味といったパーソナリティ(Personality)の側面から、職業がその個人にどれだけ適合しているかという概念である。

3つ目の鍵概念は、役割と関連が深いライフ・スペースである。Superの理論では、キャリアを単なる職業ではなく、個人が経験する多様な役割とその取り組み方により構成されるものとして捉える。多くの人が生涯を通して共通して経験する役割としては、「子供」「学ぶことに従事する者」「余暇をすごす者」「市民や国民」「労働者」「家庭人(家計を維持する者、配偶者、親など)」の6つの役割が挙げられている(Super & Savickas 1996)。そして、これらの役割を行うスペースとしては、「家庭」「学校」「地域社会」「働く場」の4つが最も一般的である。人は一生涯のいろいろな時期に、これらのスペースを舞台として、複数の役割を演じており、その結果、その人ならではの人生、つまりキャリアを構成しているとのことである。

最後の鍵概念はライフ・スパンであり、これは時間と関係する。Superは人のライフコースについて、5つの段階で構成される職業的発達段階を提唱した。その段階とは、成長段階(0～14歳)、探索段階(15～24歳)、確立段階(25～44歳)、維持段階(45～64歳)、解放段階(65歳以上)である。そしてそれぞれの発達段階の間には、「移行期(Transition)」があるとし、さらにその移行期にはミニ・サイクルが含まれるとのことである。ミニ・サイクルとは、ある段階から新たな段階へ進むための意思決定の過程であり、新たな成長、再探索、再確立といった再循環(リサイクル)が含まれる。職業におけるライフ・スパンは生涯を通して構成されるものであり、それぞれの段階でミニ・サ

イクルが生じるといえる。

以上が、Superによるキャリア発達に関するライフ・スパン／ライフ・スペース理論的アプローチの、4つの鍵概念である。先に述べた通り、外国人労働者の価値観に関する問題は、異文化という観点のみから論じられることが多かった。しかし、特に留学生から外国人労働者になる者については、発達という観点から見ていくことも必要であることは、本節の最初でも強調した。Superのキャリア発達に関するライフ・スパン／ライフ・スペース理論的アプローチは、ライフ・スペースとライフ・スパンという概念を持っていることで、留学生から外国人労働者になる者の価値観の変容を見ていくのに、有効であると考えられる。ライフ・スペースは、母国の家族やコミュニティ、日本のコミュニティや大学、職場など、個人が持つ複数のスペースを捉えることに有効である。その中で個人が遭遇する異文化についても、分析することができるだろう。またライフ・スパンは、個人の発達を捉えていくのに有効な概念である。その移行期に生じるミニ・サイクルは、留学生から外国人労働者へと立場を変える際にも、観察されるものだと考えられる。

これからの研究では、キャリア発達に関するライフ・スパン／ライフ・スペース理論的アプローチを用いて、留学生から外国人労働者になる者がどのような心理的問題を抱えており、その問題解決に向けてどのような価値観の変容が見られるか、そのプロセスを明らかにする。そして発達及び異文化の経験が、価値観の変容にどのように影響しているかを明らかにする。そうすることで、留学生から外国人労働者になる者の心理的問題とその問題の解決のために必要なことが、具体的かつ多角的に見えてくるだろう。そして、そうすることで初めて、留学生から労働者へと立場を変え、次のステップへの移動しようとする留学生の心理的問題を解決に繋げるための議論することができると考えられる。

## 注

- 1 労働者の中で外国籍をもっている者を、外国人労働者と称する。
- 2 デイスコ（2014）によるインターネットによる調査であり、日本国内の7,970社を対象として調査し、493社が回答した。調査期間は2014年10月15日から24日までである。
- 3 有斐閣（2007）『心理学辞典』によると、「発達（Development）」とは、「子どもが生まれ、大人になる過程での変化をさす。最近の生涯発達心理学では成人期・老年期での変化も含める」（p. 691）とのことである。
- 4 ただし、葉などによる一時的な上昇の変化は発達に含めない。
- 5 有斐閣（2007）『心理学辞典』によると、「成長（Growth）」とは、「生物の個体発生の過程で個体の量的側面の各部分が不可逆的に増大すること（たとえば、身分や体重の増加）、人間の場合にはこれに加えて個人がその心理的、内面的な部分で大きく変化すること（たとえば、認識能力や感情表現の成長）」という（p. 499）とのことである。
- 6 有斐閣（2007）『心理学辞典』によると、「成熟（Maturation）」とは、「種が備えている多様な形質が発現する過程の一方途のこと。心理学的には学習という語と対概念を形成する。双方の差異は、学習過程では有機体が生存している環境からの情報を自己の内部に取り組みことによって、形質を発見させていくのに対し、成熟では環境と全く無関係に発達が進行するという点にある」（p. 485）とのことである。
- 7 例えば、成人期以後に見られる背が縮まり、視力・聴力が落ちるような身体変化が、成人期以後の発達上に見られる。
- 8 「イド（Id）」とは、人性の一番大きい部分として、本能により行動する人性の生まれつきの要素を意味する。
- 9 「自我（Ego）」とは、精神分析学で使われる用語として、人性の意識的で理性的な要素を意味する。
- 10 「超自我（Superego）」とは、個人に内在化された道徳的規準と理想的自己を形成する人性の要素を意味する。
- 11 ただし、全ての「危機」を解決しなくても次の段階に進むことはできる。
- 12 Piaget（1972）による4つの段階とは、①「感覚運動期（Sensory-motor Period）0～2歳」、②「前操作期（Preoperational Period）2～7歳」、③「具体的操作期（Concrete Operational Period）7～12歳」、④「形式的操作期（Formal Operational Period）12歳以降」である。
- 13 有斐閣（2007）『心理学辞典』によると、「新行動主義（Neo-behaviorism）」とは、「行動主義の創始者ワトソンに続く、行動主義者たちの行動理論についての総称。（中略）スキナーの実験的行動分析は、今も一つの派をなしているが、行動のグラント・セオリーをめざした多くの新行動主義はすでに過去のものとなったといわれる。現在の行動研究では、行動の包括的理論を構成することよりも、個々の現象を個別的に説明するミニ理論の解明に重点がおかれている」（p. 444-p. 445）とのことである。
- 14 スキナー箱というのは、ネズミが餌を取る為の仕掛け（レバー式の餌入れ）を施した箱のことである。ネズミはいったん仕掛けを操作する餌の取り方を試行錯誤して学習すれば、レバーを押して自分から自発的に行動して餌を取ることができるようになる。
- 15 有斐閣（2007）『心理学辞典』によると、「象徴的表象（Symbolic Representation）」とは、「ブルーナーが認知発達の段階を説明するために導入した用語で、最も進んだ段階で生じる表彰形態をさしている。ここでいう表象とは、外界の情報を内的に表現する方法や表現された情報そのものをさす言葉である。ブルーナーによれば、この表象は発達の、動作による行為的表象からイメージによる映像的表象へと変化していく」（p. 413）とのことである。
- 16 有斐閣（2007）『心理学辞典』によると、「観察学習（Modelling）」は、「バンデューラが社会的学習理論を提唱するうえで中心においた学習であり、モデルを観察することによってある反応を習得することから、モデリングともよばれている」（p. 139）とのことである。
- 17 田島（2016）によると、「ヴィゴツキー理論において、言葉には特別な位置づけが与えられている。乳児は当初、生まれ持って得た能力に多くを負う非言語的な認識により、大人との交流を開始する。しかしこの子どもの働きかけに対して大人は、多くの場合、言葉をともない応答する。大人が話しかける言葉は、乳児にとって、当初は単なる音声であろう。しかし彼らはしだいに、この言葉を媒介として、大人との交渉・交流を行うことができるようになる」（p. 73）とのことである。
- 18 「三綱五輪」の「三綱」とは、王と臣、親と子、夫婦の間には、守らなければならない3つの綱（綱領）を意味する。「三綱五輪」の「五輪」とは、王と臣下との間の「義理」、親と子の間の「愛」、夫婦の間の「差」、大人と子どもの間の「順序」、友人との間の「真意」の5つの人倫（倫理）を意味する。
- 19 性格の代わりに、人格、人性という用語を用いる場合もあるが、英語表記では「Personality」という用語が通用されている。

引用文献

- 厚生労働省「『外国人雇用状況』の届出状況まとめ（平成27年10月末現在）」  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000110224.html>（2016年9月1日検索）。
- 法務省入国管理局「平成25年における留学生の日本企業等への就職状況について」  
[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri07\\_00080.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri07_00080.html)（2016年9月1日検索）。
- 近藤彩（1998）。「ビジネス上の接触場面における問題点に関する研究—外国人ビジネス関係者を対象として—」。  
『日本語教育』98, pp. 97-108.
- 近藤彩（2016）。「多様な価値観を理解する教育実践—職場での協働を目指して—」。宇佐美洋（編）『「評価」を持って街に出よう』pp. 171-187. くろしお出版。
- 佐藤慎司・奥泉香・仲潔・熊谷由理（2013）。「『文化』—文化人類学とことばの教育における文化概念の変遷と現状—」。佐藤慎司・熊谷由理（編）『異文化コミュニケーション能力を問う—超文化コミュニケーション力をめざして』pp. 3-31. ココ出版。
- 下山晴彦（1998）『教育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学』東京大学出版会。
- 小学館国語辞典編集部編（2012）『大辞泉』第二版, 小学館, 松村明（監）。
- 田島充士（2016）。「ヴィゴツキー理論とその展開」。田島信元・岩立志津夫・長崎勤（編）『新・発達心理学ハンドブック』pp. 73-86. 福村出版。
- ディスコ（2014）。「外国人留学生の就職活動に関する調査結果」  
<http://www.disc.co.jp/pressrelease/detail/is2014-1817.htm>（2016年2月8日閲覧）。
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田祐司（2007）『心理学辞典』初版第13刷, 有斐閣。
- 新村出編（2008）『広辞苑』第六版, 岩波書店。
- 福岡昌子・趙康英（2013）。「グローバル人材育成と企業の留学生雇用に関する研究」『三重大学国際交流センター紀要』8, pp. 19-38.
- 藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿（2000）『青年期以降の発達心理学—自分らしく生き、老いるために—』北大路書房。
- 渡辺映子・勝倉孝治（2003）『はじめて学ぶ人の臨床心理学』中央法規, 杉原一昭（監）。
- Bandura, A. (1977). *Social Learning Theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Barth (1969). *Ethnic groups and boundaries: The social organization of culture difference*. New York: Allen & Unwin.
- Barnlund, D. C., & Araki, S. (1985). Intercultural encounters: The management of compliments by Japanese and Americans. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 16(1), pp.9-26.
- Duranti, A. (1997). *Linguistic anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. W. W. Norton. 仁科弥生（訳）1977, 1980 幼児期と社会 1, 2. みすず書房。
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. W. W. Norton. 小此木敬吾・小川捷之・岩男寿美子（訳）1973, 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房。
- Freud, S. (1974). *The ego and the id*. London: Hogarth.
- Gluck (1989). *Japan's modern myths: Ideology in the late Meiji period*. Princeton: Princeton University Press.
- Kluckhohn, C. & Murray, H. A. (1954). *Personality in Nature, Society, and Culture*. New York: Alfred. A. Knopf.
- MaKinney, J. P. (1975). The Development of Values: A Perceptual Interpretation. *J. of Personality and Social Psychology*, 31, pp.801-807.
- Morris, C. (1956). *Varieties of Human Value*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Perry, R. B. (1954). *Realms of Value*. Cambridge: Harvard Univ. Press.
- Piaget, J. (1972). Intellectual evolution from adolescence to adulthood. *Human Development*, 15, pp.1-12.
- Rokeach, M. (1968). The Nature of Attitudes. In E. Sills(Ed.), *International Encyclopedia of the Social Sciences*. New York: Macmillan.
- Rokeach, M. (Ed.). (1973). *The Nature of Human Values*. New York: Free Press.
- Skinner, B. F. (1953). *Science and human behavior*. New York: MacMillan.
- Super, D. E. (1963). Self-concepts in vocational development. In D. E. Super, R. Starishevsky, N. Matlin, & J. P. Jordaan

- (Eds.), *Career development : Self-concept theory*. New York: College Entrance Examination Board. pp.17-32.
- Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 13, 282-298.
- Super, D. E. (1990). A life-span, life-space approach to career development. In D. Brown, L. Brooks, & Associates (Eds.), *Career choice and development*. San Francisco: Jossey-Bass. pp.197-261.
- Super, D. E., Savickas, M. L., & Super, C. M. (1996). The life-span, life-space approach to careers. In D. Brown, L. Brooks, & Associates (Eds.), *Career choice and development* (3rd de.) San Francisco: Jossey-Bass. pp.121-178.
- Tyler, L. (1965). *The Psychology of Human Differences*. New York: Appleton.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher mental processes*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (Original works published 1930, 1933, and 1935).
- 정원식 (2013). 『인간의 가치관』 교육과학사.